

# 3・11 私たちも共に震災を乗り越えた

「外国人」県民の視点から  
震災後の宮城と日本の多文化共生を問う

日時 2011年12月17日

於 宮城学院女子大学

○モリス ただいまより、「3.11 私たちも共に震災を乗り越えた 『外国人』県民の視点から震災後の宮城と日本の多文化共生を問う」というシンポジウムを開催したいと思います。

恐縮でございますが、このシンポジウムは、宮城学院国際文化学科の教育研究推進費の中から費用を出して開催しております。また、開催に当たりまして、宮城県国際交流協会から多大なご協力をいただきまして、本日開催できるようになりました。ありがとうございました。

また、本来ならば、国際文化学科の学長が来て挨拶すべきところですが、この日多数のシンポジウム行事がありまして、学科長の今林が別のところにどうしても出なければならないので、本日の進行係である私モリスが、代わりに挨拶をさせていただきますと思います。

では、シンポジウムの本題に入りたいと思います。

まず、3.11の何日後だったか私はただかに覚えていませんが、メディアの中には外国人がみんな日本を捨てて出ていきました。あるいは、もう少し時間が経って支援に人々が入ってくると、外国人は災害弱者であるので、きっと特別な支援を必要としているに違いない、あるいはもっとあからさまに外国人はみんな避難所の中、あるいは地域社会の中で浮き上がったり、差別されたり、大変な目に遭ったりしているはずであるという思いで駆けつけた人たちもいました。

では、果たしてどうだったろうかということ私たち宮城県在住の「外国人」がみずから語るというのが本日の趣旨ですが、ご登壇のパネリストの皆さんに話していただく前に、ほとんどの外国人が日本を果たして捨てて行っただろうかということ、入国管理局が災害が起こってから、3カ月ごとの外国人登録者数の統計を公表しているが、その統計から検討することにします。この統計入管がインターネットで公表しています。「震災後の在日外国人」という言葉を検索エンジンに入ると、出てきます。

それで、表1は全国、および被災した岩手、宮城、福島県の状況を示しています。見ていただきたいのは、減っている在留資格の種類が2つある一方では、「永住者」は4.4%増えました。後は技能実習生が44.7%増えましたが、ことにこの技能実習生の増加については、単純にそれだけの人たちが新規に日本に入ってきたということでは必ずしもないので、これについて今日は説明しません。

第1表 東日本大震災の被災地域における主な在留資格別外国人登録者数の推移

	2010年12			2011年3月			2011年6月			2011年9月		
	外国人登録者数	外国人登録者数	対前年末増減率(%)	外国人登録者数	対3月末増減率(%)	対前年末増減率(%)	外国人登録者数	対6月末増減率(%)	対前年末増減率(%)			
全国登録者総数	登録者総数	2,134,151	2,092,944	-1.9	2,093,938	0.0	-1.9	2,088,872	-0.2	-2.1		
	永住者	565,089	574,145	1.6	580,748	1.2	2.8	590,077	1.6	4.4		
	日本人の配偶者等	196,248	192,800	-1.8	190,478	-1.2	-2.9	185,495	-2.6	-5.5		
	定住者	194,602	189,811	-2.5	186,486	-1.8	-4.2	181,528	-2.7	-6.7		
	留学	201,511	161,317	-19.9	185,298	14.9	-8.0	186,272	0.5	-7.6		
	技能実習	100,008	123,082	23.1	142,505	15.8	42.5	144,718	1.6	44.7		
	家族滞在	118,865	119,508	0.5	120,633	0.9	1.5	120,032	-0.5	1.0		
	人文知識・国際業務 その他	68,467	70,129	2.4	70,589	0.7	3.1	68,926	-2.4	0.7		
	689,361	662,152	-3.9	617,201	-6.8	-10.5	611,824	-0.9	-11.2			
岩手県登録者数	総人数	6,191	5,257	-15.1	5,205.0	-1.0	-15.9	5,167	-0.7	-16.5		
	永住者	1,561	1,587	1.7	1,601	0.9	2.6	1,629	1.7	4.4		
	日本人の配偶者等	778	736	-5.4	715	-2.9	-8.1	681	-4.8	-12.5		
	定住者	256	240	-6.3	232	-3.3	-9.4	220	-5.2	-14.1		
	留学	425	339	-20.2	358	5.6	-15.8	356	-0.6	-16.2		
	技能実習	1,124	696	-38.1	916	31.6	-18.5	999	9.1	-11.1		
	家族滞在	129	136	5.4	132	-2.9	2.3	131	-0.8	1.6		
	人文知識・国際業務 その他	72	71	-1.4	72	1.4	0.0	70	-2.8	-2.8		
	1,846	1,452	-21.3	1,179	-18.8	-36.1	1,081	-8.3	-41.4			
宮城県登録者数	総人数	16,101	14,507	-9.9	14,016	-3.4	-12.9	14,003	-0.1	-13.0		
	永住者	3,983	4,060	1.9	4,066	0.1	2.1	4,137	1.7	3.9		
	日本人の配偶者等	1,507	1,450	-3.8	1,411	-2.7	-6.4	1,337	-5.2	-11.3		
	定住者	413	399	-3.4	390	-2.3	-5.6	388	-0.5	-6.1		
	留学	3,376	2,611	-22.7	2,720	4.2	-19.4	2,697	-0.8	-20.1		
	技能実習	865	347	-59.9	278	-19.9	-67.9	341	22.7	-60.6		
	家族滞在	1,183	1,097	-7.3	1,089	-0.7	-7.9	1,060	-2.7	-10.4		
	人文知識・国際業務 その他	360	377	4.7	363	-3.7	0.8	362	-0.3	0.6		
	4,414	4,166	-5.6	3,699	-11.2	-16.2	3,681	-0.5	-16.6			
福島県登録者数	総人数	11,331	10,328	-8.9	9,927	-3.9	-12.4	9,676	-2.5	-14.6		
	永住者	3,889	3,952	1.6	3,880	-1.8	-0.2	3,888	0.2	0.0		
	日本人の配偶者等	1,662	1,580	-4.9	1,508	-4.6	-9.3	1,396	-7.4	-16.0		
	定住者	703	664	-5.5	647	-2.6	-8.0	595	-8.0	-15.4		
	留学	583	491	-15.8	467	-4.9	-19.9	421	-9.9	-27.8		
	技能実習	1,072	847	-21.0	866	2.2	-19.2	909	5.0	-15.2		
	家族滞在	270	264	-2.2	260	-1.5	-3.7	245	-5.8	-9.3		
	人文知識・国際業務 その他	221	220	-0.5	201	-8.6	-9.0	185	-8.0	-16.3		
	2,931	2,310	-21.2	2,098	-9.2	-28.4	2,037	2.9	-30.5			

法務省プレスリリース「平成23年9月末現在における外国人登録者数について」第5表を下に作成。  
[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00012.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00012.html)

では、宮城県はどうだったでしょうか。総人数では13%減りましたが、大きく減っているのは「日本人の配偶者」のマイナス11.3%、そして「留学」と「定住者」です。「定住者」については、わかりやすく言えば、日系ブラジル人などです。決してそれだけの中身ではないんですが、この「定住者」という在留資格の人たちは震災前から宮城県にそんなに多くはいませんでした。「留学」のマイナス28%という数

値の大きな落ち込みについては、日本語学校で学んでいた人たちが多く帰国したことによるといわれています。その結果、仙台の日本語学校の経営は大変な状況になっているらしいんです。

技能実習生については、宮城県ではその多くが三陸沿岸沿いの水産加工工場で働いていて、職場がそもそもなくなっているのです、帰国せざるを得ない状況です。

「日本人の配偶者」は107人減りました。これについては、後でまた触れたいと思います。

宮城県における外国人登録者数は、全体でマイナス13%となりました。ちなみに、岩手県ではマイナス16%、福島県は1マイナス4.6%となりました。

全国平均で見れば外国人登録者数は2.1%の減少となりました。全国あるいは被災の各県の減少率について、外国人だけを取り出して云々する前には、本来ならば岩手県、宮城県、福島県の人口全体がどう変わったかという中に外国人という数字を位置づけないと非常に偏った印象を与えることとなります。このように外国人の数字だけを取り出して提示するということには、実は大変に問題ですが、通常この形で出てきているので、恐れながらこのような形でしか申し上げられないんですが、特に被災した3県においてはこのぐらいの減少にしかになっていないし、減少している在留資格を見ると、ああ、なるほど減少せざるを得ないだろうということが納得できるはずでしょう。しかし、そのもう一方で人数が増えた在留資格もあったことにも留意していただきたい。宮城県で人数が増えた在留資格は何かというと、（一般）「永住者」です。68人増えました。この68という数字は2010年の12月末日に対して68人の増加という意味です。この在留外国人統計というのは基本的には毎年の12月末日の数字を法務省が出していますもので、前年の最後の日の状況に対して68人増えています。

つまり宮城県でも留学生、技能実習生、日本人の配偶者を中心に外国人登録者が減少した一方で、永住者が増えたということになります。なぜこういうことが起こったのでしょうか。つまりこの在留資格の変遷に隠された謎があるということにしておきましょう。この日本人の配偶者はどこに消えたのでしょうか。留学生と技能実習生については説明つきますが、配偶者はどうなったのでしょうか。つまり170人が帰国したのでしょうか。そのような話も聞きますが、それ以外には在留資格を切り替えて「永住」の資格に切り替えた人も68人ぐらいいたのではないかとということが数

値上の配偶者の人減少の原因の一つとして考えられます。

あるいは在留資格の切り替えではなく、日本国籍を取得すれば在留外国人でなくなりますので、数値から完全に消えて見えなくなります。つまりその107人の配偶者はどこに消えて行ったか、入管の統計はそこまで懇切丁寧に教えてくれませんが、少なくとも半数ぐらいは永住という在留資格に切り替えたと推測の他に、震災をきっかけに日本国籍を取得した人もいたという可能性も考えられます。

つまりこの数値から何が見えてくるかという、震災をきっかけに日本との絆が強まった外国人もいました。日本を捨てて逃げ出したと報道された外国人は、日本に生活の基盤を持たない、あるいはそれが脆弱な旅行者、観光客や留学生が大部分でありました。

逆に日本に生活の基盤を置くより多くの外国人は日本に残って、地域社会の一員として災害を皆と一緒に乗り越えようとしているのです。このことが日本のメディアで一人一人については報道されてはいますが、震災直後の「みんな逃げていったんだよ」というヒステリー報道を訂正した記事は私は目にしたことはありません。

先ほどの事前打ち合わせで、あなたはなぜ逃げ出さなかったかとか、なぜいるのかと言われたんですかと外国にルーツを持つパネリストたちに聞いたら、うん、うん、うんとみんな頭を縦に振っていたんです。世間はそうみているのに、実態として私たちは残った。共に被災して、共に復興のために頑張っています。

では、まず今日のパネリストに自己紹介を3分以内をお願いします。

梶原さんからお願いします。

○梶原 今日。有名な石巻から来ました。皆さん、震災前は、石巻は本当に宮城県にあるのかなのか知らないくらいの地域だったんですが、石巻が世界的に有名になりました。韓国のテレビ局からも石巻だけの取材お願いしますといわれるぐらいの有名な石巻から来た梶原美佳と申します。どうぞよろしくお願いします。

私は韓国人で、日本に来て12年になりました。2年前に石巻でNPO法人国際支援地球村を設立しました。外国人を手助けすることができないかなと思って、始めた団体です。

この震災になる前は文化交流とか料理教室を開いていました。また、日本人と外国人と一緒に条例を石巻でも作って、外国人が少しは住みやすい場所にしたいなと思いがりました。外国人が相談できるところとか、寂しい心をお話しする場所が

なくてすごく困っています。あともう一つは、日本語がわからなくて、石巻から仙台まで行って勉強する距離感ではないので、石巻で日本語の勉強ができればいいなと思っていて、この目的を持ってNPO法人、国際支援地球村を設立して、震災になる前はぼちぼち少しずつ仲間と楽しくやっていました。

今はちょっと状況が変わっているんですが、

○モリス 今何やっているかは次にしていいですよ。

○梶原 石巻にいる800人ぐらいの外国人のために国際支援地球村を設立したんですが、その内、400人は配偶者、私みたいに日本人の配偶者、400人は魚工場の研修生で、工場に行って日本語を教えたりして活動をしていました。以上です。

○モリス ありがとうございます。小関さん。

○小関 皆さん、こんにちは。

私小関一絵と申します。中国で歯科大学を卒業して、歯医者として5年間勤めまして、それから日本に留学して、日本の大学院で歯学博士号を取得して、さらにアメリカで研究を重ねて来ました。結婚をきっかけに日本に戻ってきまして、日本に20年間住んでいます。その中で子供が生まれて私の生活は仕事から育児にシフトしました。もともと国際交流に興味があったので、大学院の非常勤講師として日本と中国の大学間の学術交流の中間パイプの役割を果たしてきました。それから地域のさまざまな活動にも参加しました。地域の活動にたくさん参加することにより、地域との交流が深まり仲間もいっぱいできました。

私は、まわりから私を外国人としてではなく、地域の一員、仲間の一員として受け入れてくれたことをとてもうれしく思っています。

そのほかに、宮城県国際交流協会で医療保健通訳サポーター、外国籍子供サポーターにも登録しています。外国人相談センターで相談員としてもお手伝いさせていただいております。そのほかに、瀛華（インカ）中文学校<sup>1</sup>で、将来日本と中国の架け橋になれる子供たちに中国語と中国の文化を教えています。とりあえず以上です。よろしくをお願いします。

---

<sup>1</sup> 瀛華インカ中文学校 在仙の中国人家族で立ち上げた、中国にルーツをもつ子供のための中国語補習校で、日本の学校に通う子供たちが中国の言葉と文化を学べる場所を確保する目的で保護者によって自主的に運営されている学校のこと。

○モリス 佐々木さん。

○佐々木 皆さん、こんにちは。佐々木アメリカです。

どこから来たかという、一番知られていない南三陸町から来ました。昔はもしかしたら志津川町は聞いたことがあるかもしれません。その場所です。私は日本語を勉強するために初めて日本に来て、日本語を学んで、そして今の主人と知り合っただけという間に32年経ちました。

震災前の31年間の私の活動はどうなっていたのでしょうか。まずは私の時代には国際化、国際的という言葉ははやっていませんでした。というのは、その当時「外人」という認識が強かったです。だけれども、私は自分の家族を守るために、自分の子供を日本の社会で守るために、一番最初に私が注目の的になったのは学校のPTAでした。もう遠慮なくPTA役員を、子供たちが幼稚園の時から卒業するまでずっと引き受けました。

そして、その後、周りのいろいろな方々からは「外国人」・「外人」ではなく、地元の人間として認めていただけるようになり、次の活動が始まったんです。

まずは、宮城県警察庁登録通訳人の仕事を始めました。今でも続けております。そして、フィリピン人妻の会をつくって、その国際友の会会長を務めています。

その後は気仙沼市の「小さな大使館」の大使館員になりました。今でも続けております。そして、南三陸町国際交流協会理事となり、また、小学校、中学校の臨時の講師として勤めています。一番大切なのは、宮城県国際交流協会の外国籍子供登録サポーター、外国人支援登録通訳サポーター、そして災害時登録通訳員を務めております。最後は英語や英会話講師をしております。そして、健康のため、ふら・ダンスのインストラクターをしています。以上です。

○マーティ 皆さん、こんにちは。

私の名前はマーティ ミックエリルスで、アメリカから来ました。現在七ヶ浜町、多分南三陸町ほどではないかもしれませんが、同じく余り知られていない七ヶ浜町に住んでいます。

初めて日本に来たのは17歳の時に、高校生として1年間留学して、2回目は東北大学で1年間国語学科で勉強しました。今はジェットプログラムというプログラムで国際交流員として七ヶ浜町に来ています。

七ヶ浜町では、姉妹都市関係の仕事、英会話の授業、そして国際交流協会にも入

って仕事をしています。そのほかに料理教室やら、小学校訪問とか、そういう一般的な国際交流活動もやってきました。

七ヶ浜町に来たのは去年2010年の7月なので、来てから1年半になります。来年も続けて勤めていくつもりです。以上です。

○大村 皆様、こんにちは。

財団法人宮城県国際交流協会の大村と申します。

私も実はよそ者でして、海外から宮城県に来ました。といっても北海道の生まれです。津軽海峡を渡ってきました。

それで、宮城県の生活は、実はアメリカさんよりも短いということが今わかりました。ですから、アメリカさんは私の宮城県の大先輩ということになるわけです。勤務先の宮城県国際交流協会でありますけれども、1987年8月に設立されております。私は1988年、設立の翌年の春から勤務いたしております。こんなところでよろしいでしょうか。

○一條 皆様、こんにちは。

山形大学の臨床心理学専攻で心理学を学んでおります一條玲香と申します。

私は実は七ヶ浜出身で、今は仙台市在住という、地元です。外国出身の方々のメンタルヘルスを研究テーマとして2010年6月より、週1回宮城県国際交流協会の方でインターンをさせていただいております。

宮城県国際交流協会では、さまざまな活動に参加させていただきながら、県内の外国人の方々の状況についていろいろと学ばせていただいております。

○モリス ありがとうございます。

私も自己紹介もせずいきなり司会を始めておりますが、流れからすると、自己紹介ぐらいはした方がよろしいかと思えます。

私はモリスといいまして、1974年4月に東北大学の日本史研究室に留学生としてきました。以後アメリカにちょっと出稼ぎに行っていた時期を除けば、土着の外国人としてずっと暮らしております。

出身はオーストラリアです。現在は宮城学院女子大学国際文化学科で、顔を見てわかっただけますように日本文化の担当の教員をしております。



では、自己紹介が終わったところで、次は登壇者の皆さんに10分以内で、震災後、各自が、自分が住んでいるところでどういう活動をしたのか、どう地域の人々とかかわってきたか、その中で経験したこと、感じたことをちょっとお話ししていただきたいと思います。

では、梶原さん。

○梶原 3月11日は、歴史的記憶に残る、私自身にも記憶に残る日だったんです。私も津波がくる場所に向かっている途中に、瞬間の判断で逃げて、今この場所に座って皆さんの前でお話しすることができているわけです。本当によかった。生き残ったなあという感覚が強いです。

生き残ったところが、私が外国人だから、あるいは日本人だからというイメージは全然なかったんです。私は石巻に住んで12年で、外国人だから私はどうこうするという考えは、正直言えば持っていなかったんです。今は持っていますが。今は石巻の地元が大変な状況になっているから、国に戻って逃げてみようかなという気持ちが出る時もありました。

けれども、私が3月11日に生き残ったという気持ちと、私は韓国語教室をやっていますが、その中の生徒の1人が亡くなりました。あの時、まだ日本語がわからなかったのが生徒が逃げ遅れました。私1人生き残ったということにうしろめたさを感じるようになりました。そこでこれでだめだ、どうすればいいかと思って、うちのNPO法人という組織を持っていて、私たちが動かなければ誰が動くのと思いました。スタッフの皆さんを集めました。うちのスタッフは外国人もいるんですけども、みな主婦なんです。スタッフの100%が主婦で、主婦としてこの震災で家を片づけたりしていましたが、みんな一段落落ち着いてから活動を始めました。7月から活動を始めることができました。もちろんうちのスタッフの中でも震災を受けて津波が家の中まで入って片づけすとか、個人個人に物資を運んだりして、いろいろな活動をしましたけれども、NPO法人としての活動は7月から始めました。写真を見たいと思いますが、7月から9月まで買い物代行ボランティアをしていました。

今お客様の家を一軒一軒訪問しながら、午前中に買い物を受けて、午後、石巻地域ではスーパーがほとんどだめになって、蛇田地区しかスーパーは動いてなかった状態で、海に近い場所にはスーパー自体がなかったんです。物資は入ってくる

んだけれども、おにぎりとか決まったものしかないので、刺身食べたいとか、自分でつくって食べたいという方にとっては、どうにもならない状況でした。自宅に避難している方たちのために一軒一軒回りながら、ボランティアを7月から9月まで、週2回ずつ訪問しながら393件の活動をしました。

地域が9月ぐらいになったら状況がまた変わってきたので、また別なボランティア、外国人だからできたボランティア活動を始めました。これは。韓国のアモーレって、日本の資生堂と同じぐらい大きな会社から何かボランティアさせてほしいという依頼がきました。9月ぐらいになると、女性の中には顔を洗ったり、前に戻りたい気持ちが出てきた時期なので、ピーリングのマッサージ、アモーレは化粧品会社だったので、ピーリング（あかず）のマッサージをするプロジェクトで、9月、10月、2カ月10回コースで仮設住宅を回りました。うちの教室を今回仮設住宅として開放しました。そして、ピーリングマッサージを顔、足、手、ツボマッサージまでしてもらいました。アモーレからスタッフが120人入っていて、参加人数は505人となりました。皆さんすごく気持ちよくなってきれいになりました。女性たちの元に戻りたい気持ち・こころをケアすることができました。

次は、被災者に一人暮らしの人が結構いたんです。被災されて家族が亡くなって、心が寂しくなっている人たちを続けて訪問しながら、心のケアをしています。静かな方が結構多いので、声をかけて、見守りをしています。「私は見守りに来ました」とは言わないんですけれども、見守りの目的で現在も活動をしています。

もう一つは、外国人に日本語教室を10月から始めて3月まで続けて、今は2つの活動を続けている途中なんです。

私がこの活動をしながら、私は外国人だからやっているという意識は最初はなかったんです。7月にはじめてボランティアに入った時は、「ああ、あなた外国人ですね」といわれました。それから2回、3回行ったら、「外国人だからありがたいですね、お世話になりました」といわれました。私は顔は外国人に見えないんですけれども、言葉が外国人だと相手にわかります。だんだん、だんだん時間がたって7月、8月、9月と活動を重ねていくうちに、今は「韓国人ですね」、「外国人です」という言葉はなくなりました。

私が地域にいる一人として皆さんに声をかける時は、12年間石巻に住んでいるから、昔の話も通じます。もしも私がボランティアとして新しく入って来て、皆さん

に話しかけたとしても、話しする種がないんでしょう。今回いろいろな国からボランティアの団体が入って、掃除やら何やらまでする多くの方が来て、「世話になりました」との声は結構聞くようになり、私は今はボランティアしやすくなっていますが、最初は「あなた外国人だから、どこに住むの、帰るの、母国に帰るのか」、といわれ、だれも心を開いてくれませんでした。特に、石巻は閉鎖的な雰囲気、考え方を持っているので、よその人を受け入れる心がないんです。

今回震災で、今は心を開いて外国人に「お世話になりました、どうもありがとうございました、また来てください」といえるようになってきています。先週ボランティアに行った時は、石巻弁で「あがらいん、あがらいん、どうぞ入ってください、お茶飲んでいって。寒いからちょっと入ってて、昼ご飯出す」といわれるぐらいぐらい親しくなっています。皆さんと「あなたは外国人、私は日本人」の区別は最初からなかったし、今は皆さんがボランティアしてくれる社会では、心開いてありがたいという気持ちがすごく強くなってきています。そう思って、今も活動しています。

最初は私も皆さんに言われました。「美佳さん、いるのね」と言われました。あなた外国人だから帰ったじゃないのか、あなたはこっちに住む人でないんじゃないのかという声をたくさん聞きましたので、私はまだ実家に行くこともできなくて、今ボランティアやっています。皆さんと一緒に、共に生きる気持ちを強く持たないといけないと思っています。私が帰ってしまえば、今まで作り上げた生活した基盤が皆なくなりますので、こっちで、できれば続けて心開いて皆さん、年とった人も若い人とも仲よく生活したいと思っています。以上です。

○モリス ありがとうございました。では、続けて小関さん、お願いします。

○小関 私の話は、まず災害時言語ボランティアの登録から始まります。

それは、8年前のことなんですけれども、当時私は町内の防災訓練に参加したところで、たまたま隣にいた中国人の留学生がいまして、通訳してあげました。その時、仙台市国際交流協会のスタッフの方に先に声かけられ、はじめて災害時言語ボランティアのことを知りまして、後ほど登録しました。今となってもう8年も経ちました。

それ以来、防災訓練への参加や防災関連のラジオ出演、また震災時サバ飯コンテストの審査員を務めたり、いろいろな防災関連の活動に参加させていただきまし

た。そういう活動を通し自分の防災意識も高まってまいりました。

実は3月11日に強い揺れがきた時に、ある程度心構えができていました。家族の安否をまず確認した上でボランティアをしようと、まだ揺れが収まらないその時から、そう思いました。

私は震災翌日の早朝、仙台市の国際センターにできた多言語災害支援センターに駆けつけました。朝一番の仕事はまず市内のライフラインや避難所の情報、余震と津波への注意の呼びかけなどの日本語原稿を、韓国語と英語のメンバーと一緒にそれぞれの言語に翻訳し、それをFM仙台のスタジオに持って行って三ヶ国語で放送しました。また、多言語での電話の受付や避難所回りをして、新しい情報が入り次第、またそれを翻訳して、放送局に持って行ったり、ポスタにして張り出ししたりしました。当時情報が限られている中、外国人がとても不安な状態でした。たくさんの問い合わせの電話が国際センターに直接来ていました。異国で生活している外国人、特に言葉の分からない人にとっては、ここにすれば、なんらかの情報がもらえ少し安心できるようだったので頼りにされていました。食糧探しにきた人もいました。避難所では食べ物が不足していて、避難所によっては、お年寄りと子供しかもらえなかったそうです。残念ですが、国際センターは避難所と指定されていなかったもので、水・食糧などは配給されていませんでした。

また、12、13日当たりから原発についての問い合わせがかなり増えました。日本で公式発表された情報が少なすぎ、逆に海外メディアでは原発事故が日本以上に深刻に伝えられていたので、外国とつながりのある外国人は当然日本人以上に敏感になり、不安を感じていました。冷静を保とうと自分に、そして周りにもそう伝えていたつもりですが、結局、その時、どうなっていたのか自分にも分かりませんでした。原発事故の重大さと原子炉の不安定さに対する不安や恐怖、そして情報が不透明の状況の中、自国国民の安全確保のために各国大使館が動き出しました。早くも13日当たりから国際センターのロビーにドイツ人の帰国団体が現れ、空気が一気に緊迫したような感じがしました。

続いて、15日に、私の携帯に中国大使館の領事さんから一本の電話が入りました。話の内容は二つありました。大使館は帰国したい人のために新潟空港までのバスを出しているのです、子ども二人と帰りたいなら、どうぞそれに乗ってくださいという誘いでした。二つ目の話は、バスが足りないのです、もし可能であればバスを探してほ

しい、というものでしたが、それに続いて領事さんは「ご自身が帰国することを優先にしてください」と気を使って付け加えてくださいました。その時、私は中国に帰ろうということが全く頭になかったのです。しかし震災後、私も主人も毎日支援活動さに出ていましたので、毎日留守番をしていた当時小学校5年生と中学校1年生の子供達の安全と食事のことが気がかりだったので、やはり落ち着くまで子供達だけを中国に送りたいと考えました。友人の付さんに話したら、「任してください、無事に連れて帰るから」と言ってくれました。本当にありがたいお言葉でした。子供達がいなくて寂しいですが、身軽になった分だけボランティアに専念できるようになりました。15日に子供達を送り出したあとに、すぐ家に戻ってパソコンで、バス会社を調べ始めました。思ったとおり、仙台市、県内のバスは全く手に入れない状態でした。作戦を変えて、山形のバスを確保することができました。それからの三日間、大使館のスタッフと一緒に多くの人を見送りしました。一番印象に残っているのは、南三陸の複数の水産会社で働いていた研修生達の一行のことでした。津波でパスポートを含めすべての所持品が流され、作業着のまま、被災した会社の日本人役員にミニバンで仙台まで送ってもらってやっとの思いでたどり着いてきました。万が一のためでしょうか、彼女達は自分の服にお名前と家族の連絡先を書き、中国語で励ましの言葉も書いていました。新潟空港に向かうバスから手を振ってくれた彼女達の顔がとても印象的でした。18日の夕方5時ぴったりに最後のバスを送り出しました。そのとき、なんだかずっと走り続けてきて、急に立ち止まった感じがしました。そのとき、車のガソリンがすでになくなっており、距離的には国際センターまでいくのが無理になっていました。MIA（宮城県国際交流協会）の方がまた家から比較的に近いので、大村さんにお電話して、お手伝いさせていただくことにしました。

あの時いろんな思いで一時帰国して避難した方の内、今多くの方はすでに戻ってきていて、各分野で被災地の復興のために頑張っています。中国人の中では、例えば、何度も被災地に足を運んで瓦礫の片付けなどをしている人、無料で被災した方に一ヶ月分の漢方薬を出した漢方医、震災直後残った貴重な食材で作った料理を一週間毎日避難所で配っていた中華料理屋さん、沿岸部の避難所に炊き出しに行った中国人グループもいました。たとえ永久的に日本を離れた人達にしても、きっと今は日本の震災のこと、日本人の震災に直面しての冷静さと忍耐強さ、日本人がい

かに頑張っているかを世界の各地から発信している、そして、なんらかの形で日本を支援していると私は信じております。

○モリス 時間です。無慈悲なタイムキーパーは時間ですと宣言しました。小関さん、貴重なお話をありがとうございました。

では、続けて、佐々木さん。10分以内でお願いします。

○佐々木 すみません、立っていいですか。

○モリス いいですよ。

○佐々木 震災後の主な活動をお話ししたいと思います。

震災後、急に大切な日常の仕事が全部止まってしまったんです。それで、これからどうするかなと思って、家も流されて何も無い。仕事も無いです。何もかもがなくなりました。それで、じゃあ、「ぼけっとするのか」というと、「いや、これだとうつ病になる」と思いましたので、自分の家族の安否を確認した後に、震災の2日後に、私は本部の方の避難所に顔を出しました。何かお手伝いすることがあるかもしれないと思いました。

避難所の方は、「ああ、アメリカ先生だったらもう大歓迎だ」と、通訳もできるし、力もあるしということで、いろいろ仕事があるらしいので、その時はまだボランティアの方はどこも来ていなかったから。どろも瓦れきも手付けられていなく、私たちの町はがれきの山と化していました。うちの町の情報は、皆に知られるまでに一番遅かったんです。

メディアの方々に被害の映像を見せられた時、ショックでした。私たちの町は日本の地図から消えたのではないかと思うぐらいの被害を受けました。私の家は、基礎だけが残っていました。

本当に日本の地図から消えるぐらいの被害を受けましたから、私の町は。

じゃあ、それで2日後にボランティア活動を始めました。私の担当はあちこち入って通訳したり、または物資の方で仕分けをしたりするということでした。3月11日は町の人口の半分以上が行方不明だったんです。そして、家が残った方々は全人口のほんの5分の1だけなんです。あとみんなは家がないです。流されました。

私がいた所が本部の避難所なので、1,000人以上いました。ずっと座ったまま寝たりとか、食べたり、座ったままですよ。そして、そこにおにぎり1個、お昼はパン1個という食事でした。3週間後に炊き出しありがたくいただきました。

私の方の活動はどうしたのでしょうか。私の活動は外国人向けだけではなくたんです。フィリピン人だけに関わったわけではないんです。なぜでしょうか。私ももう地元の一人なんです。それで、支援物資を必要にしている方々に「はい、どうぞ、どうぞ」といって配りました。本等にあの時は支援物資は足りないぐらいでした。だけれども、物資が必要であれば、「はいどうぞ」ということで、一人には全部あげられないけれども、1個、2個いかがですかと分けていたということです。

それで1カ月終わりました。2カ月半で、避難所にいる方が全員仮設住宅に移されたんです。それでは、仮設住宅にいる、移されたんですから、楽だねと思われるでしょうが、違います。はっきり言うと、仮設住宅に入ったらもっと寂しくなるんです。なぜでしょうか。

仮設住宅の方は狭いです。1日ずっとそんな狭いところにいると、もう頭がおかしくなるんです。いろいろの思い出が浮かぶんです。たとえば、以前、自分だけの部屋があったことや、広い茶の間でみんなと一緒にご飯を食べることができたことなど。しかし仮設に入ると、今度は6畳の部屋でみんな座っているし、そこに荷物もあるし、本当に身動きできないぐらい狭いです。そして、仮設住宅に入ってしまったら、支援物資はもうほとんどないんです。必要なものだけが渡されますので。

幸いに私がこの本部の方の避難所でボランティア活動をやっていた時に、いろいろな人に出会ったんです。岐阜から、大阪から、日本全国からいろいろな人が私のところに来たんです。なぜだかわからないです。結局、押しかけてくる方は外国人を目当てにしていたんです。なぜかわかりませんが、私が外国人だから、皆私と話したがっていました。

だけれども、そういう方々には私はに言いました。この震災で苦しんで避難しているのは私だけじゃないんです。南三陸町民のほとんど全員が避難しているから、もし支援物資をくれるというならば、何か助けをしてくれるならば、周りの皆さんにも分け合いますということで、窓口として受けますと言い切りました。

おかげさまで、私の実家には私が無事だという知らせが届きました。というのは、1カ月近くか、3週間かな、電話がつながらなかったんです。連絡方法はなかったんです。そのほかに、3カ月ぐらいは水道はなし、電気もないです。そのようなところですので、周りの皆さんを見ると、言葉でいえなくても、失ったものが顔に書いてあるんですよ。

そういう方々にどういうふうに挨拶するのか。結局軽く挨拶するの。毎朝皆さんに会う度に、「お元気？じいちゃん、ばあちゃん元気かい。ご飯食べたかい」という一言だけでみんなは、「ああ、食べましたよ」って、明るく元気に答えてくれました。

震災後は何が必要なのか。触れ合いです。コミュニケーションです。物資よりも話し相手が必要なんです。私の方は物資の受け入れを今でも続けていますよ。窓口としてですから。きたら連絡して、地域の担当にお願いして物資がきましたから取りに来て、あとは皆さんに配ってもらいます。

あとは今、フィリピン人に向けた私の活動の一つは、仕事場がなくなりしたから、それで、もちろんフィリピン人たちの方は、今まで旦那さんと力を合わせながら生活を送っていたので、それで何ができるのか考えました。宮城県国際交流協会のご紹介で介護士の勉強をお願いしました。おかげさまで8月から始まって、今月6人が合格しました。介護士は人気です。

介護士の勉強は、外国語ではやらないですよ。全部日本語の勉強なのです。私の国は皆ご存じのように、漢字は使わないんです。受講生は、最初、平仮名もカタカナも大体わかるぐらいでした。だから、この勉強会は8月から始まって、どこから始まったと思いますか、平仮名の書き方と読み方からです。今は漢字です。もちろん全部の漢字ではないけれども、介護士の仕事に関連する言葉を皆さんが暗記しています。

私にとって、相手が外国人であっても日本人であっても、みんな一つの社会の中で暮らさなければならないのです。もしできるんだったら、このフィリピン人の妻たちの熱心さを活かして、彼女たちの将来のために、今すぐじゃなくてもいいですから、私がいなくなっても、彼女たちには何か身につけられるんだったら仕事できるんじゃないかなと思ひまして、介護士の勉強を勧めました。

今の私の活動は、うまくいくかどうか分かりませんが、心に穴があいているおばあさんやおじいさんのアフターケアです。夫人は前、食堂をやっていたので、おかげさまで夫は小さな仮設食堂を始めました。私の英語教室も開校しました。私の英語教室は3年前は1人で80人ぐらいの生徒がいましたが、今は4人しかいない。笑い事じゃないんだけど。

けれども、私は稼ぐより毎日何かできることを楽しみにしております。それで、



夫が食堂、開いていますが、あまり商売になりません。なぜでしょうか。ほとんどのお客さんが私に会いに来るんですよ。私に会いに来るんだから、コーヒーは無料、お茶は無料、あとお菓子も無料です。

それにしても1日やることがあるのであれば、楽しいです。自分の楽しいことがあれば寂しいことは飛んでしまうんです。私の方はみんなの前で今日立っているのは、私のおかげで、夫のおかげではないんですよ。皆さんのおかげです。どうもありがとうございます。（拍手）

○モリス では、ありがとうございました。「仙台時間」<sup>2</sup>「せ s の10分以内で終わりました。

では、次はマーティさん、お願いします。

○マーティ じゃあ、私ちゃんと短く話します。

私が勤めているところは国際村というイベントセンターで、たまに避難所になったりします。もう何年前から避難所として指定されていて、3.11の地震のあと、だんだん人が入ってくるようになって、その時もちろん電気もつながらないわけなので、津波がくることさえわからなかったですし、でも、その日から1カ月間ぐらい、私がたまたまそこで働いていたから、そこに住むことになりました。

家自体は大丈夫でしたけれども、スタッフとして私は毎日朝5時、6時ぐらいに起きて、夜11時、12時ぐらいに寝て、その間にはほかの職員がなさっているすごい仕事ではなく、トイレのタンクに水を入れたり、バケツに水を入れたり、そしておにぎりを握ったりしていました。支援物資は多分2週間目ぐらいから入ってくるようになったんですけれども、服とか食べ物、毛布を分けたりして、その時期は私にとって外国人としてではなく、私はただ普通の町民でした。

私にはアメリカ大使館から電話がきて、もうバス出るんですけれども、一緒に行きますかと言われるまでは、アメリカに帰国する選択肢があること自体は考えていなかったです。言われていなかったし、周りの人には帰らないのかと言われたこともなかったですし、私が町の職員だったので、私がいて当たり前でした。

そして、初めて私が外国人扱いされるようになったのは、マスコミが入ってくる

---

<sup>2</sup> 仙台では、「仙台時間」が東京時間より30分遅れるといわれており、約束の時間に間に合わなかった場合に「仙台時間で間に合った」という言い訳に使われる。

ようになった時です。すごい数の新聞記者が来るようになって、外国人がいるということを知るとみんな集まるんですよ。私はそれがすごく嫌でした。記者の中で、書く記事は、書く前から決まっているんですよ。若い女性の外国人が、つらいのに被災地で日本人のために頑張っているという記事を書こうと私のところに来るんですけども、本当は私はただバケツとか運んだり、食べ物を配ったりしているだけでした。もっとすごいことしている人たちがいっぱいいるのに、何で私のところに来るかって、すごく恥ずかしいというか、いらいらまでします。

私たちの七ヶ浜町には外国人避暑地というところがあるんですけども、そこには何十年も住んでいる外国人がいるんですよ。その外国人たちは、震災があつてからは毎日食べ物を東京からとか運んできたり、今は職人を呼んで無料で日本人たち、町民の家を建て直しているんですよ、無料で。誰もその人たちのインタビューもしないし、誰も滋賀とか神戸とか奈良から来たボランティアのインタビューもしないし、みんな私のところに来るんですよ、なぜか。

それで、来るたびに何でここに残ったんですか、何で逃げなかったんですかと言われて、その扱いが嫌だったし、今も嫌です。私が避難所で暮らしていた頃は、私はただの被災者でした。外国人の被災者ではなく、特につらかったわけでもなく、逆に私は家はまだあるので恵まれた方だと思いますし、私よりも家を流された避難者の誰でもいいから、その人たちに注目してほしいかったです。マスコミはどうせそういうものだと私は思いました。

だから、私はその経験から何を習ったかというところ、七ヶ浜町の町民から、なぜ帰らなかったんですかと聞かれたことは一回もないです。今もないです。残ってくれてありがとうございますとも言われません。「大変でしたね、家大丈夫でしたか」と言われるぐらいですけども、特別扱いされないし、私はそれでいいんです。それが私の中の理想の日本の形だと思います。

現在は何の活動をしているかというと、今も国際村で仕事をしていて、毎週、仮設住宅でやっている編み物教室に参加したり、そこで会った仮設住宅の人たちに英会話を教えたり、そのほかには普通の仕事をしているだけです。皆さんの活動が余りにもすばらしくて、ちょっと恥ずかしく思えるぐらいですけども、私はただ町民として今生活しているだけという感じで、外国人のために頑張ったこともないし、ちょっと恥ずかしいんですけども、私は震災があつたからこそ、自分はこの町の

町民の一人なんだということを、神戸に住んでいた頃より、仙台に住んでいた頃よりも本当に強く感じています。

だから、私たち外国人は、多分みんなこう思っていると思いますが、特別扱いもしてほしくありません。ただ町民と仲よくしながら、幸せに暮らしたいだけです。毎週編み物教室に行つて、老人会のマージャンクラブにも出ているだけです。外国人みんなを弱者とみながる人がいるという話が出たんですけれども、弱かったり、つらかったり、こわがったりしているんじゃないくて、ただ日本人、本日ここにいらつしやる方々みんなと同じように、復興に向かつて、復興を望みながらも、ただ毎日の日常生活を大事にしながら生きています。とりあえず私はそうです。

○モリス ありがとうございます。

では、次は大村さん、お願いします。

○大村 それでは、冒頭モリス先生の方からも、宮城県の外国人の状況のご説明、震災後の人の動きのご説明がりましたけれども、今一度確認させていただきたいと思ひます。

まず、宮城県には震災前に約1万6,000人の外国人の方がいらつしやいました。この数は、宮城県民全体の0.68%ぐらいですから、決して全国的にみても外国人が多い地域とは言えません。

しかしながら、この1万6,000人の外国人の内訳を見ますと、ここにもいらつしやいますけれども、日本人男性との結婚で移住されてくる方々、特に中国、フィリピン、韓国、こういったところからの女性たちが多く、それからもちろん沿岸部には、技能実習生とか、研修生という形で働いたり研修したりするというような方々が多い。

仙台市内だけ見ますと、留学生が目立つような感じですがけれど。それから今回の地震は地震というよりも多くの方々の命が津波で亡くなつております。この津波の被害地、こちらには私たちの計算では1万6,000人のうち、約5,500人の外国の方々が暮らしていらつしやいました。先いきましたとおり、その多くが配偶者であったり、それから水産加工の現場で働く技能実習生、それから研修生であったりする、こういった方々です。

こういった方々の情報入手の方法の特徴としては、インターネットの環境にないということが挙げられます。多くの方たちにとって情報の得方は携帯電話、口コミ、

それから地域の日本語教室、きょうも登米<sup>とめ</sup>の日本語教室の方々、遠くからたくさんいらしてくださっていますけれども、日本語教室が在住外国人のこういった大きな災害の時には安否確認、それからその後の個別の被災者支援ということで大きな働きをしてくださる、いわゆるセーフティネットの役割を果たすということが、今回の震災で私たちも強く実感したところであります。

今日入り口のところにこのような2枚物の資料を置かせていただいておりますが、実はこんなにたくさんの方がいらっしゃると思わなくて、多分資料少なかったかと思いますが、お持ちの方にはごらんいただければと思いますが、この資料は東日本大震災被災外国人支援事業、私ども宮城県国際交流協会が被災から今までそして今後のことも含めてなんですけれども、どのような被災地の外国人支援をしてきたかということの一覧表、それから裏にはこういった事業をどのようなスタッフの顔ぶれ、それから外部のボランティアさんの力を得ながら行ってきたかということがまとめられてあります。

今こちらにいらっしゃる方々は、お分かりのように日本語も上手ですので、情報の漏れなどは少ないと思いますが、やはり外国人がよくわからない日本語の環境の中で、情報が届かなかつたり漏れてしまったりしますが、そういったことで不利益をこうむるようなことがあってはいけないと私たちが活動をしております。

私たちは外国人、日本人という話ではなくて、被災しているか、被災していないか、そういうぐらい悲惨な状況の現場をずっと回ってまいりましたので、外国の方だけを取り上げた特別な支援ということは本当に考えてなかったのですね。

もともと私ども国際交流協会は、在住外国人支援が主たる事業ではありますけれども、これは外国の方を特別扱いするというようなことではなくて、外国の方ならではのいろいろなハンディによって日本人と比べて不利益をこうむらないよう、この部分をサポートしようという、そういうことを理念として仕事を行っている組織でした。

ですから、被災後16日間緊急車両を駆使して、気仙沼から南は山元町まで、16日間毎日、毎日走り続けましたけれども、被災地に行っても外国の方にだけ特別にと映らないような活動を心がけて参りました。この被災地巡回で、約60名ぐらいの外国の方たちに避難所ですとか、いろいろなところで出会ったわけですがけれども、配偶者の方の中にはご主人を津波で失ったり、それからご家族を失ったり、それから

家を失ったりした方たちもたくさんいらっしゃいました。

特に、南三陸町に行った時は、町全体が壊滅状態で、ナビなんか全然使えないような状態だったんです。建物がなくて目印がないという中で、アメリカさんのような古くからその地域に暮らしている方たちの力を得ながら、私たちは被災地を回って外国の方たちの困っている状況を調査し、そして個別の支援に入れるようにいたしました。

こういったことで、私たちが回るにあたっては、日本語教室、それからそういった地域の外国の方たちの力なしにはこういった活動はできませんでした。もちろん事務室においてもうちの外国人スタッフ、中国、韓国、フィリピン、ブラジル、いろいろな国のスタッフがいるんですけれども、実はこの外国人の相談員が全員各国のそれぞれの国の大使館と深くつながっていたんですね。そのことによって、正しい情報を迅速に得ることができました。

今回の被災外国人支援事業、どの事業においても私たちは地域の外国の方たちとの協働の作業ということでやり遂げることができたと思っております。私たち日本人だけではちょっと無理だったかと思えます。

このシンポジウム、実はここに登壇する方たち、モリス先生からこの企画の相談を受けて、私の方から推薦させていただいたんですけれども、いろいろ詰めていくうちに、実は小関さんの方から、本当に私登壇していいんだろうかという、ためらいの言葉が聞かれたんです。先週ぐらいだったでしょうかね。なぜかという、一部の報道で逃げ出した外国人という表現があったんですね。

宮城県を離れて外国に戻られた方、この方たちに対して世間は、日本人は一体どういう目を持っているんだろうか、そういう中で、一生懸命中国の方の県外脱出に力を貸したご自分のことを小関さんは責めるような風があったんです。

でも、そのように自分を責めるのは大きな間違いだと思います。私たちは各国の大使館がものすごいスピードで素早くバスを手配して、邦人保護のために多くの外国人を県外に出してくださったわけですが、このことによって、どれだけこの地域が混乱しないで済んだかということを今振り返ってみると、強く実感しております。

情報が錯綜する中で、交通手段も断たれたこの地に、外国の方たちが滞留してパニックになった時に、私たちは本当の被災地である沿岸部になど行けなかったと思

うんですね。それを素早く各国の大使館が希望する方たちを国外に出してくださった、そのことによって私たちはようやく被災地に出向くことができた。津波の被災地は放射能のことよりも、もう目の前の問題で皆さんが本当に困っていらっしゃいましたので、こういった方たちの支援にあたることができたと思っております。

特に、被災後の事業の中で、被災地の外国の方たちに集まっていただいて、母国語でご自分たちの経験を語ってもらう、これは心のケアにつながると思って実施したんですけれども、この県内6カ所で行いました振り返る会については、次にお話しさせていただく一條さんの方に詳しくお話ししていただきたいと思っておりますけれども、約200名超の外国の方たち集まっていただきまして、母語でそれぞれ自分のつらかった経験、それからそのような中でも嬉しかったこと、感動したことなどさまざまな声を拾い集めております。

この事業につきましては、県警、弁護士、行政書士、臨床心理ご専門の方、それから資生堂さんといった企業にもご協力いただきまして、県内6カ所で開催することができました。今後も今回の地震から私たちが得た知見、それから全くタイプの違う都市直下型の地震で阪神淡路を経験された兵庫の方たちとそれぞれの知見を突き合わせた形で、どんな形の初期の情報提供がいいのか、それから防災・減災対策として何がいいのか、未来志向の提言につなげていけたらと思っております。以上です。

○一條 では、先ほど大村さんの紹介にありました宮城県国際交流協会で行った振り返る会に同行させていただいて、そこでお聞きした外国人の方の状況についてお話しさせていただきたいと思っております。

まず、振り返る会では、いろいろなことを外国の方に話していただいたんですけれども、主なテーマとしては、困ったこと、大変だったことというのをまず聞きました。その後で、嬉しかったこと、よかったことを聞いています。

これは、つらい体験だったり、困ったことだったりというのは自分自身でも思い出すことはあるんですけれども、よかったことや嬉しかったことは、こういうつらい状況の中でそういうことに目を向けるというのが、なかなか一人では難しいのではないかとということで盛り込まれていました。

その中で聞こえてきたことの中で、よかったこととして、まずこれは日本人も同

様ですが、近所の人たち、なかなか普段だと話す機会がなくて、余り知らないような人たちからも、普通に声をかけられて、「避難所はこっちだよ」とか、「こういうところでこういう物資の配給があるよ」と、日本人と全く同じような扱いを受けたということ。つまり自分たちが外国人扱いされるのではなくて、地域社会の一員として周りの人たちに捉えられていたということが嬉しいといったような話が上っていました。

それから、積極的に避難所に行って炊き出しなどの活動をみずから率先して行っていた方もいました。大変だったことの中では、もちろん物資がなくて大変だったというようなこともあったんですけども、特に外国の方ということ言えば、母国の人たちとの連絡がとても取りづらくて、また連絡が取れたあとの母国と日本の間で、いろいろな葛藤を抱えている人がいたということです。

これは、まず被災地はすぐに電気がなくなって、多分自分たちが自分たちの状況が余り把握できていないのに、海外とか外の世界ではかなり混乱した情報が流れていたと。それで、母国にいる家族たちからは帰ってこい、心配だからというような電話が毎日、毎日かかってくる。それは自分たちが状況を正しく把握してなかったのかもしれないし、わからないですけども、自分は大丈夫だというふうに伝える、残るといふふうに伝えるというので、葛藤を抱えてきたという人たちがいました。

それと関連してなんですけれども、そのやりとりの中で、実際に一時帰国された方もいらっしゃるし、そのまま残って大丈夫だからというふうに言っていた方もいらっしゃるんですが、外国人の方々が海外への被災地の実情を伝える情報源となっていたということがわかりました。

一時帰国した時にマスメディアの取材を受けた方もいらっしゃいましたし、ツイッターとか、インターネットを通じて、私たちはこうである、仙台の中心部は大丈夫だから心配しないでとか、そのような情報を発信していたというような話が聞かれました。

それから大変だったこととして、避難警報ですが、放送なんですけれども、やはり使い慣れない難しい日本語での放送、「津波がきます、高台へ避難してください」という津波を小さな波だと思ったという方がいらっしゃいました。ふだんは聞き慣れない日本語で、これが例えば「大きい波がきます、高いところへ逃げてください」だったらすぐにわかっただろうというふうにおっしゃっていて、やっぱりふ

だん使っている言葉、特に緊急性の高い情報というのは、やさしい日本語で伝えてくれるといいのではないかなというふうに思いました。

そして、外国人にとってもわかりやすい言葉というのは、例えば小さな子供や、ほかの方々にとっても、もちろんそれはわかりやすい言葉なんじゃないかなというふうに感じています。

○モリス では、みんなありがとうございました。

これまで、6人に話をいただきました。その話の中にいろいろなテーマが出ていたと思いますが、その話に入っていく前に、宮城県と多文化共生という言葉についてちょっとだけ説明したいと思います。

多文化共生とは何かとよくご存じの方もたくさん今日おいでになっていただいています。普通は、多文化共生とは何だろうか聞き返す人も多いです。簡単に言えば、外国人が日本の社会に入ってきて、日本人と一緒に仲よく暮らす。

ただし、その場合、例えば私は顔面障害でありますので、どこから見ても外国人であるということは隠せません。あるいは例えば言葉にちょっとしたなまりが残っている人だったりします。私たち外国人は日本人と違うのです。違いますけれども、だからそれはどうだ、そのままでいいんじゃないですか。違いを認め合いながら、それを受け入れながらも、共に地域社会で暮らし、その地域社会をつくっていく、支えていく、そのようなことを実現するのが多文化共生という理念です。

宮城県は、この多文化共生については全国的に見てとても有名なこと、あるいは大変なことをやっております。そのことで宮城県は多文化共生について詳しい人たちの中で大変に有名になっていますが、宮城県民自身はこの事実についてはほとんど知らないのが現状です。

これはどういうことかという、宮城県は、浅野知事の時代に、多文化共生社会形成推進条例というものをつくり、日本で初めて多文化が共生する社会をつくろうということを条例として定めたところです。そのような宮城県ではありますが、先大村さんが言いましたように、宮城県にいる外国人は全人口の0.68%、四捨五入で0.7%に過ぎません。一時0.7まではいていたんですが、リーマンショック前から減少してきたんです。

そのような宮城県の外国人は一カ所に集まって、そこに行くと外国人がいっぱい



いる団地があるような状態ではなく、地域社会の中に散らばってみんなのそばでひっそりと暮らしております。そのような点在地域とか、散在地域というのが宮城県の外国人の状況です。

今まで日本での外国人研究は、ほとんど集中地域、典型的には外国人が工場労働者として愛知県、あるいは関東周辺などで1カ所に集まって、そこに行くと、その町の人口の10%とか25%ぐらいが外国人であるというようなところばかりが注目されてきました。

日本における多文化共生の議論はほとんどそのようなところを想定して行われてきました。それで、宮城県が人に気づかれずに日本、中央政府自体は外国人政策で何にも決められない状態で、宮城県が先にこの多文化共生社会形成推進条例をつくりました。

それで、震災になりました。そうしますと、じゃあ、宮城県の外国人はどうなったのでしょうか。実は多文化共生という言葉が日本で注目を集めるようになり、それが、阪神淡路大震災がきっかけでした。

大阪、神戸は外国人集中地域で、その中で外国人のところに情報は行き渡らない、取り残されていたというようなことで、多文化共生という言葉が出てきて、外国人が日本の社会で阻害されて生きていくためには何が必要かということで、おおよそ20何年かけていろいろ議論されてきているんですが、宮城県では、私たち、私自身もその条例制定、それ以後の宮城県の計画制定にもちょっとだけかかわってきたわけなんですけれども、ずっといわゆる集中地域、先進地域を見つめてきて、そこから私たちのところで何か応用できる実践はないか見てきたんですが、今度の震災では、いや、宮城県ってちょっと違うんじゃないかとはっきりと自覚するようになりました。

まずは宮城県では外国人は取り残されていないんです。地域の人たちが外国人を守るために動いたし、外国人も地域社会の中で動いて、自分の住んでいるところを守るために一緒になって活動しました。

マーティさんも言っていたんですが、自分が一番外国人だと感じさせられたのは、外から人が来て、「あなたは外人です」といわれた瞬間です。私自身は顔面障害ではありますが、地域社会の中では、「あなたはどこから来たか」とか、初対面の人も一度も言われたことないんです。「あなたは外人です」と言ってくるのはみんな

な東京なまりの人たちです。外から来た人が初めてそういう差を持ち出してくるわけです。

そのようなことを私自身も非常に強く感じましたが、それ以外に皆様のご発言の中で、展開したいと思っているテーマがありました。まずは小関さんのお話ですが、小関さんご自身のところには、お国に帰りませんかと大使館から電話がきました。しかし、その時「帰っていいよ」と言われたのは、小関さんと子供さんだけですよね。旦那さんは含まれないんですよね。

私たちがここで被災しまして、非常に強く感じたのは、地域社会の中で私たちはその一員として暮らしているのに、白河の関の向こう側から、外から来た人たちが私たちの地域との連携、地域との絆をむしろ壊すようなことをたくさんしてきたのではないかということです。

私自身もそう深刻な被害はないんですけども、小関さんに振りかかってきたその話、あと一條さんも言っていました、残る外国人には外に出ていくようにものすごい圧力がかかってくることもありました。

この中で皆さんに自分が外国人と感じさせられた瞬間については、当該者、この場合は大村さんと一條さんはちょっと別枠になりますが、梶原さんから一言コメントいただければ。

○梶原 周りから言われたことですね。「あなた帰らないの」と言われた以外はそんなに外国人だと周りから思われたいです。今私は地域でやる仕事として、うちのNPOの仕事でボランティア団体を持っているし、ほかに個人で会社を持っていて働いています。地域の人たちと一緒に暮らしていて、何人かが「あなたは外国人だから頑張るね」、「ハングリー精神あるね」とは言ってくれますが、みんなの頑張る姿を見て、「ああ、私も頑張ろう」と感じます。しかし、外国人だから頑張らなければならないとは私は感じないんです。

○小関 私も同じように感じます。私たちも長い間日本に住んでいて、日本の文化、習慣にある程度慣れてきていまして、地域との交流も日ごろから皆心がけています。小さなことから、例えば子供の学校のPTA役員や、地域の子供会の役員をやらせていただき、町内会の活動にも積極的に参加してまいりました。周りの皆さんから外国人ではなく、地域の一員、仲間の一員として見てくださいます、「外国人だから」と感じたことはないですね。

○モリス ジャあ、佐々木さん、お願いします。

○佐々木 国に帰らないかと言われたのは、メディアの方々だけです。レポーターだけです。外国人だから、国に帰るのは当たり前じゃないかと思われたようです。またほかのレポーター、「国に帰った方が少し楽な生活が送れるでしょう、いかがですか」ということは言われました。でも私は津波、地震がきたから南三陸町に、困難に遭ってもいたいという気持ちが前より強くなりました。

なぜでしょうか。南三陸町の社会、地元の方々が、私をその社会の一人として認めてもらうまでには何十年かかったのかわかりません。そんな簡単ではなかったんです。やっと認められたので、外国人じゃなくて、南三陸人ということだけで本当に嬉しいです。それで、幸せであっても、苦しくても何があっても私は南三陸町から動きません。おかげさまで皆さんはつらさの中で私のところに集まってコーヒーを飲んだり、お茶を一緒に飲んだりしています。

○マーティ はい。私も前に言ったように、初めて外国人として注目されたのは、新聞記者が来るようになった時です。私は皆さんと違って何十年ここにいるわけではないし、仕事の関係上ずっといられるわけでもありません。ただ、私は震災の前もそうでしたけれども、震災があっても変わらずセヶ浜町のことが好きで、日本で住んできた中で一番心地がよくて、この町なら私はずっといてもいいような、それは震災の前もそう思ったし、震災があってもやはりその気持ちは変わらないし、多分南三陸町の町民たちも、石巻市の市民たちも被災地に生きて生活している人たちもみんな同じ心境だと思います。

だから、うちも外国人じゃないと言っているわけではないけれども、女性でもいるし、外国人でもいるし、アメリカ人でもいるし、アメリカ人の中でもマサチューセッツ出身でもあるし、それらは私のすべてを定義しているんじゃないくて、最終的に私たちは被災地に残るという選択肢をとっただけで、それを問われたくない、余り。まるでそれが異常なことみたいに、それを余り突っ込んでほしくないです。

○モリス ありがとうございます。

では、当事者ではありませんが、大村さん、一條さんが何百人もの被災地の外国人に会ってきましたので、このテーマについて何か一言追加説明か、こういう話があった、これは印象的だったという話でもよいと思いますが、あればお伺いしたいと思うんですが、無理強いはしません。

○大村 ちょっとご質問からそれるかもしれませんがけれども、先ほど宮城県が全国に先駆けて多文化共生に関する条例を策定したというお話しありましたがけれども、実際は条例を知らない県民も多いわけですし、この条例があったからこそこんなに地域で外国の方たちがしっかり根づいて活躍できていると、そういうことではないと思います。

もう既にそういう事実があって、ただそれをもっと推進しましょうということで、行政の方が後づけみたいな形でこういった条例ができたということで、実態としては本当によその県に負けないほど、実は私は震災後いろいろなところに行って、この被災の体験の話をさせていただく機会をいただいているんですけども、行く先々で改めて宮城県ってすごいなあと思うことが最近とても多いんです。

一方で、こういった、地域の中でしっかり根づいていた外国の方たちとの共生を妨げるような支援が県外から震災後続々入ってきている現状に、ちょっと心配、気がかりなところがあります。

私たち宮城県国際交流協会には車もありません。それから当初はガソリンもなかったもので、被災地に行きたくても行けない状態だったんですね。ところが、首都圏からはどんどん、どんどんNGOが、つまり全然土地勘がない人たちがどんどん、どんどん被災地に入って行って、いったいどんな活動をやっているんだろうともものすごく気になっていたんですね。

結局、中には日本人社会から外国人だけを取り出して、共生の道からわざわざ遠ざけるような、そんな支援につながるような、危惧さえ感じるような支援もあったりとかして、このあたりについては今後私たちも極力地域に出向いて行って、何とか元の形の宮城県、宮城県のすばらしいところをまた復元できるように、そんなふうに活動していきたいと思っております。

○一條 外国人だからとか、外国人なのにとという言葉の裏には、やはり外国人は弱者であるとか、支援されるものである、またはよそ者であるというような視点があると思うんですね。これは特に外部の支援の方々がそういうような視点を持っていたというのは、今大村さんが言ったように、地域の外国人の人たちは中で活躍をしていて、地域の人たちからはそういう目では見られなかったんですけども、外の人からはそういうような目で見られたということだったんだと思います。

それで、そのようなあらかじめ弱者という形で捉えている支援というのは、上からの支援というようなもので、特に被支援者には負い目を感じさせるような危険性があるのではないかなというふうに感じました。

例えば、もちろん日本人の方であっても、与えられるだけの支援、もらえるだけの支援というのは、「私たちはできない存在なんだ」とかというのを一方で感じさせられることになってしまうわけですね。

例えば現在避難所とかでは、被災者同士の見守りというような形で、被災者自身が自立していけるような支援にシフトしているんですけども、外国人の支援の場合には、やはり外国人は弱者であるという視点に立った、自立を支える支援ではなく、与える支援が多かったのではないかなというふうに思います。

今回、シンポジウムに参加していらっしゃる方も、とても地域の中で活躍している方々で、外国人は支援されるものという、そういうような考えをまずは問い直して、外国人の方自身が活躍できるような場の提供であるとか、関係性をつくるような状況の設定であるとか、そういうような支援も考えていく必要があるのではないかなというふうに感じました。

○モリス ありがとうございます。

話を聞いているうちに、次に話を振ろうと思っていた方向と違う方向の話が次から次へと出てきますが、まず初志貫徹で原点に立ち戻ることにはしたい。被災地にいると、今日の話をもうちょっと展開しますと、日本国政府は人類を日本人と外人に分けて考えているのです。女性であるとか男性であるとか、仙台の人であるとか、何かである以前に、人類は根本的には日本人と外人に二分されるというような頭で物事を考えるんです。

報道も入ってくると、例えばマーティさんが言ったように、外国人はこういう人であるはずだという一種の紋切り型を持ってきて、それに当てはまる人を探して、それで報道していくという問題も起こります。

しかし、津波というものは、外人も日本人も何もなく、すべてをのみ込んでいきます。津波の前ではみんなひとしく被災者になります。被災地にいると、そこにいるのは被災者のみというのが多分今日の話の一つの結論だろうと思います。もう一つ触れたい問題は、被災地にいると、たとえば私がここの学生と話してよく言われ

るのは、私たちが被災地の中で経験しているものと、報道されているものの間には何かのギャップがあるのではないかと、被災地の複雑極まりない状況が余りにも一面的に伝えられているのではないかという違和感を含んだ感想です。

佐々木さんとか、マーティさんのように、この人が一つのメディアで取り上げられると、次から次へとその人のところに新聞とかテレビが取材に来るようになりまして、その人だけが際立たせられるようになります。私自身の別の経験として、取材の巡礼地みたいなのができて、そこだけがスポットを浴びて取り上げられるということがあるのをみていますので、これはある程度仕方がないかもわかりませんが、今日の話の中では、メディアが伝えていることは、かなり偏ったものにどうしてもならざるを得ないのではないかと。ただし、これはメディアの宿命かも知れません。

このようにして、自分自身がメディアで伝えられている外国人と自分の存在について、あるいは自分が周りで見ているものについて、皆さんがどう感じたのかということについて、またちょっと一言コメントをいただければと思います。

じゃあ、梶原さん。

○梶原 震災後に、私の団体にも何件かNHKから、新聞社から、テレビ局から依頼があったんです。そのような依頼を受ける時、私今何もしてないと答え、別な外国人がやっていることを紹介しました。このようにほかのみなさんを紹介して回したんです。

私は外国人が外国人を助けるNPO法人を立てあげているからメディアとしてとりあげやすいようです。それで来ると思います。こちらが何もしてない状態でも、「あなたが何かする時お願いします」と結構メールもくるし、直接くる依頼もあります。でも何もしてないし、しても新聞には出たことはないんです。なぜか。

私は石巻、被災地に住んでいる人だし、今外国からもすごい数のボランティアさんが入っていて活動する人たちがたくさんいます。だからそちらをどうぞやってくださいと取材依頼を結構回したんですが、もちろん企業からお願いされて、やる必要がある時にはやります。今は私は「これをお願いします」と頼まれても何もしてない状態なので回しています。

外国人だから、メディアには好かれます。目立つんでしょう。外国人を記事に載せれば、皆さんが興味を持っているものだと思っているから載せたいでしょうが、

うちの記事はもう今まで十分載ったので、十分だと思います。

○小関 話を少しそらすことになるかもしれませんが、支援は国籍とは関係ありません。震災後、中国のある企業家から友人を通して私のところに一通のメールがきました。その内容は、今回の震災で親を亡くした子供を支援したいが私に窓口になってほしいという内容でした。私は念のため、その方に確認しました。支援される子供は国籍が関係ありますかと確認したんです。「いえ、関係ありません」と言われました。「孤児だったら皆同じです、国籍などは関係ありません」という返事が返ってきました。私の知る限り、心が温まるこのような国境を越えた民間からの支援は、これだけではありませんでした。世界がつながっているなあということを、震災を通じて改めて感じさせられました。

○佐々木 取材されていいことも悪いこともありましたけれども、ほとんどよいことです。何がよいことなのか、南三陸町が知られるようになりました。それで南三陸町やこの地域に情報が入るようになり、またフィリピン人たちに対する助けをよこしてくれました。

おかげさまで、最近私は元の仕事に戻ることができました。だから時間が少し厳しくなっております。

そんな時、誰かが取材してどうしても外国人の話を聞きたいということになると、私が知っているほかの外国人、たとえば知り合いの韓国人たちを紹介します。本人に連絡してOKをとったら、次は、その人たちで直接連絡をとって話してもらいます。

例えばあるフィリピンの方が取材を受けるとしましょう。そこにはその外国人の家族、旦那さんだとかという人もいるでしょう。そこからネットワークと同じように、「ほかの方はいかがですか」ということで、今度は外国人でなくて南三陸町民の方々、日本人も外国人も関係なく取材の輪が広がっていきます。今のところでは報道、メディアの取材は、こういう流れで行われています。

メディアは大体いい役割をしています。ただ、あるメディアはたまにはオーバーにしておりますので、私はそういう時は逃げることにしています。その逃げる方法は何でしょうか、ほかの方に取材を送るようにしております。

○マーティ そうですね。アメリカさんがおっしゃったように、メディアの取材は悪いことだけではないですよ。七ヶ浜町も余り知られてないちいちゃな町なので、私が新聞に載ったら、七ヶ浜町を知って寄附金を送ってくれた方もいますし、自分の

主義としてどこか嫌なところはあるんですけども、でも、それが七ヶ浜町のためになるなら私は我慢できます。ただ、外国人を見下ろすような言い方をするメディアの中にはあるかもしれないんですけども、見下ろさずに取材する方法はあると思います。

私は、幾つかのメディアから取材を受けているんですけども、その中で本気で私に興味を持ってくれて、ただ、たまたま私のことを知って、たまたま私のストーリーを発信したいという人たちもいたし、その中で私の活動だけでなく七ヶ浜町の町民にも興味を持ってくれた人たちもいました。しかし、その中で、例えばある放送局が私について15分の番組をやりたいと言い出してきました。それがまだ避難所にいる時ですよ。避難所にいる私たちに放送できるように何か特別にイベントを企画してくださいと言われてました。被災者たちとマーティさんが話しているところを撮りたいので、知り合いではなくてもとりあえず何かのイベントをつくって、そういうふうに見せかけてくださいと言われてました。私は人形じゃないし、被災者たちもそうですし、だから、そういうメディアは嫌なんですよ。

ただ、七ヶ浜町のため、南三陸町のためになるなら、ある程度のそういう偏見を我慢することはできるんですけども、マスコミにもっと気を遣ってほしいだけです。私たちも人間なので、私たちの気持ちをもうちょっと考えてほしいだけだと思います。

○モリス マイクが回ってきましたので、もしも大村さんと一條さん、深くかかわっていたという立場でコメントがあれば。

○大村 今、メディアのことが出ていましたけれども、私の勤務する国際交流協会にもうんざりするほどメディアの方たちがいらっしゃいました。同じ話を何回も何回もさせられて、業務だけでも大変なのに、こういった方たちへの対応というのが、よく天災の後には人災がくると言われておりますけれども、まさにそんな状況でした。

でも、私ある時気がついたので。同じ話を何回も何回もしているんですけども、自分の中で実は同じ話をすることで、だんだん考えの整理ができてきたということがあって、こういったことも悪いことばかりではないなと考えるようになりました。ただ、今マーティさんもおっしゃいましたけれども、こうであろうという、初めからシナリオをつくって取材に来られる。これは別に外国人に対する取材だけ



ではなくて、往々にしてあることかなという気がします。

ですから、私たちはもっとメディアリテラシーということをきちんと勉強しなければならぬと思いました。今回の震災の関係で、私自身はメディアの功罪についていろいろあるかもしれませんが、とても嬉しかったことが一つあります。

それは、今まで多文化共生、それから外国人の問題というのは、先ほどもモリスさんがおっしゃっていましたように、集住地区、つまり南米からの移住労働者の問題に焦点を当てた議論ばかりだったんですね。

しかし、国の政策は、自民党の時代も今の政権もそうなんですけれども、移民構想という中には、配偶者の方たちの問題が一切触れられてないんですね。高度人材であったり、少子高齢化に伴う労働力不足を補う労働力のための移民、このことばかりが語られていて、この東北、それからもっと言えば、全国で言えばもっともたくさん地域が配偶者の方たちをたくさん抱えているわけなんですけど、こういった地域のいわゆる結婚移住者の方についてこれまで光が全くといってよいほど当たってなかったんです。

私ども、岩手、宮城、福島、3県の国際交流協会は、平成19年度から中央のこういった勉強会とかには、もう余り期待できないなど、やっぱり地域の問題は、私たち地域の者がみずから解決していかなければならないということで、この結婚移住者の多い地域の独自の問題を共通の課題とした勉強会をずっと続けておりました。

でも、今回の地震で図らずもメディアがこういった配偶者の方たちにもものすごく注目してくださっていたんですね。こんなにたくさんのお嫁さんたちがいたんですかということで、取材される方の中には時にとても嫌な形の取材をされた方もいて、お気の毒ではあったのですが、全体から見ると、こういった配偶者の方たちの問題によりやくスポットが当てられたということで、私としてはこれはメディアの功の一つだというふうに考えております。

○モリス ありがとうございます。

事前の打ち合わせで、何かちょっと違ったことが語られていたような気がしますが、ただメディアの役割については幾つか非常に重要な論点が出たと思います。特に、言うならば、今回の震災をきっかけに東北、それまで非常に偏った目で気が向いた時だけに振り向く東北そのものがまず非常に注目されるようになりました。

それまで東北に興味がなかったような人たちがたくさん本気で東北を歩いてみて

みると、それまでの東北のイメージと全然違うものがたくさんあるということも出てきました。その中で、実は東北の多文化共生にも大変注目すべきことがあるということもやっとスポットを浴びるようになりました。

また、大村さんが言ったように、これまで日本人が、国の政策を決めるような人たちが、あえて目を向けようとしていなかった結婚移民、結婚移住という現実政治家はどうかわかりませんが、少なくともより多くの日本人がそういう現実を認識するようにはなったということも一つ大きな前進ではないかと思います。

時間が迫っている上に、どうも節電のためか、本学の財政事情のせいか暖房も切られているような感じがじわり、じわりと骨にしみてくるような、私たちは冷遇されているのではないかというような感じがしてきています。

最後に、皆さんに一言だけ言いたいことはないのかと聞きたいんですが、そこに移る前に私にも一言を先に言わせていただきたいと思います。

私たちは、ここで繰り返し外国人は支援されるだけの対象ではないということを書いてきたんですが、皆さんお気づきかとは思いますが、登壇者の発言の中には、外国人・外国出身者でも地域社会の中、つまり外国人のキーパーソンという言があるんですが、地域社会の中で、私たちがさまざまなネットワークを持っています。

そのネットワークは、外国にルーツを持つことによっては海外にまで伸びていること多くあります。海外から多額の義援金、支援金も私たちを通して地元に来てきたということもあります。あとは、混乱する情報に対して私たちが現地にいる人として、よりバランスのある情報をいろいろの局面や方法で海外に逆に流していました。

あとは、例えば南三陸、志津川町といったある地域で何かの仕事をしようと思ったら、ネットワークを持った人間とつながらないとどうにもなりません。しかし、そのネットワークを持った人間は実は佐々木さんのような外国人だったりするということも、また東北の一つの現実です。

外国人は皆浮き上がっている、差別されているというようなことではなくて、地域社会の中でいろいろな役割も果たしています。佐々木さんの言葉の中には、地域社会に受け入れられるのには長い年月がかかったというちょっと注目すべき言葉もあって、それについて多分いつか機会を改めてまた聞かせていただく必要があるかもわかりませんが、私の話はもう長くなっておりまして、それでは、もう一回梶原

さんからお願いしたいんですが、ここを締めくくるに当たりまして、これだけはどうしても言いたいということがあれば、おおよそ3分以内でお願いします。

○梶原 私個人としては、「外国人だから」とか「国はどうだこうだ」という言葉はおたがいに言わなくてもいいかと思います。一般のした方がもっている外国人のイメージ、皆さんが想像しているイメージと実際の人物との違いが大きい。外国人に会った時の差が結構大きいので、皆さんは今日大学生が多いので、できれば外国人のイメージをちょっと取り除いて、同じ人だ、人間だからという考え方から始まれば、外国人だ、外国人だから何がどうだということはなくなるだろうと思います。外国人も同じようにご飯を食べたり、寝たりなど人間として全部あなたと同じことをします。ただ文化が違うだけで、異常は何もないです。同じ人間なので、もしあなたが外国に行って生活した時、こんな震災があった時はどうするか、立場を入れ替えて考えてみれば、外人がみんな逃げたというような言葉は出ないかと思います。外国人は皆さんと同じ人間、人なので、少しは待っていてくれて、理解する心を開いてくれればありがたいと思います。

○小関 正直に言いますと、長年外国、日本に住んでいると、自分は何人であるかはふだん余り意識しなくなりました。長年日本に住んでいて、日本の文化、習慣に慣れて、あるいは国籍を日本に変えたりする人もいますが、皆それぞれ自分のルーツがある、自分だけのアイデンティティを持っています。自分の祖国と日本という二つの文化の中で生活しています。その架け橋になる役割が私たちにあると思います。これからもこのことを自覚して、できることを一生懸命やっていきたいと思います。よろしくお願いします。

○佐々木 一言だけ。短くします。私たちは皆人間なので、一つの社会で仲よく暮らしている方が一番いいんじゃないかなと思います。文化の違い、言葉の違いは何かかなりありますので、大切なのはハートです。気持ちです。どうぞよろしくお願いします。

○マーティ 私の一番のアドバイスは、できれば留学してください。自分が外国人になってみてください。そうしないと、ある程度理解できないところがあると思います。そして、留学は楽しいし、すごくいいことですよ。だから、本当に機会があれば留学してください。そして、機会があれば子供に留学させてください。それが一番多文化共生、多文化社会に導いていく道だと私は思います。

○大村 今回の大災害では、宮城県だけで行方不明、それから犠牲になられた方合わせて1万1,000人以上でしょうか。そのうち6カ国24名の外国の方の死亡が確認されています。今回の災害では、津波によって失われなくてよかった命もたくさんあると思うんです。最後に私の方からは、日本人、外国人だということではなく、阪神淡路の地震を含めて、これだけたくさんの犠牲が出ているわけです。もうそろそろきちんとした防災対策、これはもっと携帯電話の会社も、それから公共放送のNHKさんも含めて真剣に防災、減災対策に協力をしていただけるような、そんな働きけを今後ぜひ皆様方としていけたらなと思っております。

○一條 語弊を恐れずに言うならば、外国人の方々にはたくさん活躍されている方がいる一方で、やはりその日本語力がなかなか難しい方も実際にはいらっしゃいます。そのご自分の力、能力を発揮できるようになるまでに、やっぱり外国の方々というのはハンディキャップというものがあるので、そこに対する支援というのは忘れてはいけないことだというふうに感じております。

○モリス ありがとうございます。

みんなそれぞれの思いを語ってくれました。一條さんが一番最後に言ってくれた、外国人のための支援というものは、これは物資とかそういうものではなく、日本の社会に適應できるための支援、あるいはその中で自分が持っている能力を発揮できるための支援、これこそが在日外国人が、あるいは在留外国人が最も必要としているものではないかと思えます。

バブル経済以来、政府が来年こそ外国人受け入れについて国民的な合意をつくりましようと言ってきて、何もしないままにおおよそ30年も過ぎていきます。今は外国人受け入れについて議論をする段階ではなく、日本には20万人以上の外国人がもう住んでいます。これは東北の1つの県の人口に匹敵するだけの数なんです。受け入れる、受け入れないという議論はさておき、現にいる人たちがこの社会の中で周りと平和的に、自分の持っている可能性を輝かせながら暮らしていくためには何が必要かということをもろく考えていただかなければならない段階にきていると思います。

そうであるならば、先の大村さんの話ですが、あとは一條さんも言っていたんですが、「津波がきますから高台に逃げてください」と放送されても理解できるように、一応日本語を学習する機会、あるいは自分の持っている能力を発揮できるよう

な資格の認定、あるいは資格を勉強するきっかけ、こういうことがあって初めて本当にこの社会が必要とする外国人支援は実現されるものだと思います。

津波など、そういう大災害時や非常事態でなくても、もっと社会の根底からの支援が必要だということが、一番最後に出てきましたが、それも実は本日の話からさらに先の話になります。

いつものモリスの脱線が出てきたところで、これで本日のシンポジウムを閉会させていただきます。

皆さん最後までご清聴ありがとうございました。（拍手）

## あとがき シンポジウム「共に乗り越えた」に込められた意味について

2011年3月11日の大震災、というよりは、東北太平洋沿岸の人間のだれとしてもこれは「震災」である以上に「津波災害」であったが、この災害以来、私がこのシンポジウムの構想を温めていた。そのきっかけとなったのは、一つには外国人が日本を捨てて国外に集団で逃走しているというヒステリー報道であった。

### 1. 外国人が皆この国を捨てた、という言説・空説

このような報道に初めて接した時には、驚くどころか、来るべきものはいよいよ来たかと思った。日本が危機に立たせられた時に外国人が挙ってこの国を捨てて行くに違いないという言説は、震災前からすでに用意されていた筋書であった。外国人問題が脚光を浴び始めた1990年代はじめからすでに20年経っても、さらに多文化共生に関する総合的な対策が急務であるという認識が多くの政治家や国家官僚によって共有されているにもかかわらず、国政レベルで多文化共生社会形成のための意味ある政策が何一つも実現されていない背景には、一部の政治団体が吹聴している排外主義的な宣伝が大きく影響していることは、いうまでもあるまい。

その種の攻撃材料の主なものの一つに、外国人（とりわけ在日韓国・朝鮮人）が日本国籍をとらないのは、いざとなればこの国を捨てて自分の国に帰っていくための逃げ道を残したいからだ、という仮説がある。原発事故の発覚直後、日本に根を深く下していない外国人が、各国の大使館に促されて多量に出国を開始したことを目の当たりにしたこの仮説の信奉者たちは、我が意を得たりとばかりに自分の主張が裏付けられたと意気込み、見捨てられたとひがみながらも得意になっていた。「外人は信用ならん」という彼らの主張が科学的確実性を獲得したようにみえた瞬間であった。このような信念・信仰に裏打ちされた「事実」であったからこそ、だれもがその種の報道の信ぴょう性に疑問を呈することができず、だれもがその実証性を検証しようとしなかったのである。より覚めた目をもったジャーナリストがあとになって外国人が被災地に残留して復興のために尽力していることや、海外から数多くの外国人がボランティア活動をするためにわざわざ渡航してきていたことをいくら報道したところでは、このような事例は個別例外的なものとして理解され、既定の「常識」となった外国人国外逃走説に本質的な変更を迫るのに必要な説得力、というよりも訴求力をもつには至らなかった。

震災前から何十年にもわたって、世論から国政の政策形成過程までを歪めるほどの力をもったこの仮説が、震災をきっかけにさらにより多くの人たちに信奉されるようになり、かつ「歴史的事実」に裏付けられた「客観性」までを帯びるようにならなれば、この国における多文化共

生社会の実現がさらに遠退くのではないかと懸念する。のみならず、より深刻な懸念材料もある。

関東大震災後に起こった朝鮮人虐殺事件のようなものが今回の震災後に起こらなかった。しかし、ソーシャル・ネットワーク・サービスという新しい媒体を通して外国人を攻撃する誹謗中傷や根拠のないデマが瞬く間に、かつしきりに流れていたという事実を、震災直後に起きた一つの社会現象として直視しなければならない。今回は、東北という地域社会で起こった大災害であったから大事に至らなかったかも知れないが、歴史的に外国人などに対し不寛容な伝統をもつ地域で同規模な災害が起こり同様なデマが流布し出したらどうなったかわからない。近年、高い確率で襲ってくると予想される次の大規模災害では、外国人についてどのような言説が社会的に「常識」として定着しているかによって、人命にかかわりかねない深刻な問題となる危険性がある。東北地方では心配されるような事態におよばないどころか、それとは大きく異なる事実がここで確認されたことは、東北に住む人々皆が誇りにしてもよいことであり、ここの地域社会の健全性と可能性を示す好例である半面、日本のどこでも必ず同じような結果になったかどうかかわからないという不安は払拭しきれない。だからこそ、宮城県の被災地で外国人の人たちがここの地域社会の中で何をし、何を経験したかということ、私たち外国に繋がる人たち自身の手で検証し、宣伝することがこの災害に関する総合的な検証の一環として不可欠である。

## 2. 「外国人」と「多文化共生」は相容れない概念

さりとて、外国に繋がる人たちにとって、「仇」は排外主義的な言動だけではない。

シンポジウムの発言の中には、「外国人」支援という大義名分を掲げながらも当の「外国人」がもっている社会的関係を見無視した「支援」でかえって相手とその家族・縁者を傷つけるような事例がしばしば見受けられたという証言に注目されたい。

私自身は、今度の災害をきっかけに「外国人」とは何かを自問し続けることになった。

たとえ見た目が「外国人」そのものでも、被災地においてはそこにいれば皆が等しく被災者であった。<sup>3</sup>被災者の中でも当然被災状況によって著しい不平感があることも事実ではあるが、それを越えた強い一体感を感じたのは、私一人ではなかった。

しかし、震災後、県外から公務員、公共団体、NPOやボランティアの人々が多量に宮城県の地

---

<sup>3</sup> 震災後、被災地の中で例外的に私をみてすぐに「外人」と騒ぐ集団はあった。小学生・中学生であった。ここには、テレビのバラエティー番組やワイドショーによって広められる東京的な価値観および文科省とNHKが推し進める異文化・国際理解によって図式化される「外国人・日本人」像の弊害をみることができる。

域社会に入ってくるようになったら、「あなたはどこから来たか」としきりに聞かれるようになった。初対面の挨拶代りのその言葉は、地元と外の間を即座に見分けられるぐらいの法則性で我が身に降りかかってくるようになった。そのような言葉を発する人たちに自覚があったかどうかかわからないが、その言葉の裏には、「ここは私たちの国です。外国人のあなたはここに何をしに来ているか」という言外のメッセージが強く感じられた。自分の出身地と東北との文化差に戸惑い躓くそのような人々の困惑ぶりを幾度も目撃した私としては、この無自覚な挨拶によって暴露される常識的な「内・外」の境界線の倒錯または事実上の崩壊に対し、曖昧な笑みを浮かびながら「私は地元の間人ですが、あなたはどこからお見えですか」と丁重に言葉を返すほかなかった。

極論を恐れずにいえば、この一年間の思索の末、「外国人」とは国籍という法的な属性を示す言葉であり、それ以上でそれ以外でも意味を持たない言葉であるという結論に至った。自分の子どもが小学生だったころに校庭に足を踏み入れると、必ず「外人だ！外人だ！」とはしゃぎ立てる子供が現れ、ここに文科省流の異文化・国際理解の成果のほどをみることができるが、そこへ自分の子供の同級生が駆け寄ってきて「違うよ！外人じゃないよ！マー君のお父さんだよ！」と相手に訂正を迫ると、先まで騒いでいた子供が納得した顔をして自分の遊びに戻った。子供のこの素朴なやり取りに、シンポジウムで語られた「外国人」たちの多様性が凝縮して表現されている。「外国人」ではあるが、それが私たちの人間としての属性の極一部に過ぎず、しかも、それが意味を持つ文脈は世間的常識に反して極めて限られている。「外人」である前に、家族、同僚、隣人、仲間であり、深まっていくに従ってその関係の中で「外国人」という属性は、法的な手続き以外にはほとんど意味をなさなくなる。

「外国人」だから言葉がわからない、生活習慣がわからない、ごみの分別の仕方がわからない、法律がわからないというような発想は、前提から間違っている。「外国人」だからわからない・できないのではなく、だれも教えたことがないから、教えようとならないから、学習する機会が保障されていないからできない・わからないのであって、「外国人」であることが問題の本質ではない。成人してから言葉も文化も異なる社会に移り住み、自分が苦勞して会得してきたコミュニケーション手段も社会常識も何も通用しないような状況に立たせられた時にだれでも深い挫折感、孤独感、無力感を味わうことであろう。人に依存しないと自分ひとりで何もできないその時の心性は、語弊を恐れずにいえば障がい者に突然なったようなものである。しかし、この「障がい」は、身体的なものでも先天的なものでもなく、支えてくれるようなよい環境で努力と経験を重ねていくうちに緩和または「克服」可能なものである。シンポジウムに登壇していただいた



外国に繋がる方々のほとんどは、宮城県の地域社会に最低でも10年以上暮らしてきている。世間がイメージする「外国人」からほど遠い方々ではあるが、彼女たちの生き方にこそ宮城県における熟成した多文化共生の真価をみることができる。

震災後、「外国人何々」として語られ実践されたもろもろの事柄は、「外国人」という語句を使えば使うほど、日本語としてこの言葉が持っている弊害、すなわち「外国人」であることをあたかも治療・矯正不可能な先天性障害のように決め付けるという発想、を喚起し、話者の意図に反する効果をもたらしてきた恐れがある。このような語法・発想の限界を超えるべく、このシンポジウムで語られたことの背後にあるものを解説すれば、「多文化共生」とは「外国人」対策・支援に止まるものであってはならない。「多文化共生」とは、「外国人」が地域社会との関係性を築き深めていくことを側面支援するものであるべきである。したがって「多文化共生」とは、「外国人」を対象に限定するものではなく、地域社会を構築するための施策でなければ功を奏するはずはない。このシンポジウムの登壇者が口を揃えて言っていることは、宮城県の「外国人」を「個」ではなく、ネットワーク（社会的関係）の中の人として捉えるべきだということである。来て間もない人は、当然、このようなネットワーク・関係は未発達で狭小であるが、在留年数を重ねた人ほど、良好な環境にさえいればこのネットワークが広範囲で多彩多様なものになっていくはずである。このような豊かなネットワーク・人間関係の構築と活用の重要性こそ、今回の震災を通してみえてきた宮城県の多文化共生の成果であり、かつ今後の課題でもあるのであるまいか。

別の角度からいえば、その人の在留年数に見合ったネットワークをもっているかどうか、その人がおかれている環境の健全性をはかる重要な指標となるはずである。

また、外国人を地域社会の中に生きる一員として捉えると、在留外国人の多くが津波、地震や、福島原発事故と放射能汚染という未知の危険に直面してもこの国から出て行くことを選択しなかった理由も見えてくるはずである。ここから「逃げ出す」ことは、すなわち、長年苦勞して築き上げてきた愛情、友情や信頼をすべて捨てて、「本国」といえども住み慣れない土地で失業者となり居候やホームレスとなることを意味するに他ならない。少しでも考えたら外国人集団逃走説の非現実性に気付くはずなのに、それに気付かないのが国籍という法的な範疇を人間の本性までを規定するものと錯覚させる「外国人」という言説の社会的影響力の魔力である。

### 3. 日本語教室の重要性

今回の震災を通してみえてきた多文化共生の課題とは、外国に繋がる人たちのネットワークを豊かにすることだとすると、それを実現するために現実的にとれる手段も震災をきっかけに見

えてきたといえる。その鍵となるのは、各地域の日本語教室である。

シンポジウムでこのことを指摘したのは、宮城県国際交流協会（MIA）の大村氏である。地域のボランティアによって運用されてきた日本語教室の重要性と有用性とは、各地で被災した「外国人」を繋いで支える役割を果たしてきたことであるという。県内の被災地を隈なくまわって260人以上の「外国人」に面談やアンケートを行ったというMIAの活動経験に裏付けられた重みのあるご指摘である。

宮城県の日本語教室のなかには、きわめて先駆的な実践を行ってきたところがある。石巻のおよび登米市の日本語教室がそれぞれ大変先駆的な活動を行い、今回の震災で特に大きな力を発揮しているが、日本語教室の重要性は、日本語教育にとどまらないことに注目されたい。誤解がないために明言するが、日本語教育そのものが大変重要であることは、いうまでもない。たとえば、石巻地域では、研修生に対する日本語教育の重要性が実証された。ましてや、日本に永住する予定の日本人の配偶者などにとっては日本語教育の重要性はなおさらである。ただ、それに加えて、学習者の精神的なサポート、社会習慣などの学習、同国出身者とのネットワークおよび他の「外国人」および日本人とのネットワーク構築にも大きな役割を果たしているのが地域の日本語教室であることにもあわせて注目されたい。ことに結婚移住者にとっては、大村氏が指摘するように日本語教室、というよりは、日本語教室を運用しているボランティアたちは、日常生活の支援者であり、非常時のセーフティネットである。しかし、宮城県の事例から考えると、日本語教室が研修生（つまり労働者）の受入の健全化にきわめて大きな役割を果たしたことを考えると、日本語教室が果たしてきた役割の検証と評価が、日本における健全な多文化共生社会を実現する上で非常に重要であることがわかるはずである。

しかし、単純に日本語教室をもっと増やせばよいかというと、それほど単純なものではない。このように地域の日本語教室の重要性に注目したら、それとあわせて、この教室を運用している献身的なボランティアにかかる多大な負担をも直視しなければならない。日本語教室を単に増やすのではなく、日本語教室に対するサポート体制を整えていかないと、そもそも、日本語教室が成り立たない場合が多いことが現実である。ボランティアはしたいが、日本語教室で求められるほどの負担には耐えられない人の方が多い。また、苦勞して日本語教室設置までこぎついたので受講者がほとんど集まらない、という事例もある。ボランティアによる日本語教室の設置がどんな小さな自治体（あるいは、広域的な自治体連合）にできそうな、低コストで効果が高い多文化共生推進政策のようにみえるが、一般的には、このような教室の運用を持続可能にするには、地方自治体と地域社会の連携によるサポートが必要である。特に、国には何も期待できない状況

では、予算と人材がない状況でできることを自治体主導でやる他ない。

まず、自治体としては、日本語教室が成り立つために必要な空間（教室）、コピー代（年間1～2万円ぐらいか）、受講者および教師の交通の便の確保（例えば駐車所の確保や、送迎バスの運用）からはじめればよい。さらに欲を言えば、特に保健と教育関係の職員と教室教師との年1・2回程度の交流・情報交換をただけで、教師たちの負担が軽減できる。

地域社会として、たとえば、民生委員に外国人住民にも目配りをもとめる。学校のPTA役員と日本語教室教師、学校の先生と教室教師との交流の場を年に1・2回設定する。日本語教室に外国人住民（労働者も結婚移民など）が通える環境を整えておくことが、長い目でみて地域のためになるということを理解してもらうよう、行政が啓蒙活動に努める。外国人の嫁をもらった家庭は、家庭として（つまり、「外国人」だけではなく、受け入れた側も）サポートが必要であることをもっと社会的に認識してもらうよう、傾向活動をする。この場合のサポートとしておそらくもっとも効果的なのが、家族同士のふれあいであろう。日本語教室に家族会ができると、さまざまな問題により適切に対応できるようになる。事業所で外国人労働者を使用しているのであれば、その人たちの日本語学習を保障するが、長い目でみて仕事の効率化にも繋がることを理解してもらう必要がある。そして何よりも、日本語を学習することが生涯のプロセスであること、片言の会話では「日本語がぺらぺら、意思疎通が自由にとれる」と思わないことが重要である。

「外国人」について指摘される多くの問題は、行政と地域社会が力を合わせてサポートするようになれば、常識の範囲を超えるもの以外については、解決できるはずである。今回の震災で日本語教室の重要性が注目はされたが、それは逆に、どれだけの仕事・責任がこのボランティア組織に押し付けられてきたことの裏返しでもあることをけっして忘れてはいけない。

2011年3月11日の震災以来、宮城県における多文化共生が試されることになった。この試練に対し、宮城県の地域社会は、すばらしい回答をだしている。このシンポジウムでの証言は、それを伝えるものである。これまでは、日本における多文化共生について語る場合には、いわゆる集住地域に焦点があてられ、それ以外の地域で何が進行しているかについてほとんど振り返られてこなかった。そして、集住地域からあがってくる情報は、問題を多く含むような話が多かった。

それに対し、宮城県では、外国人研修生を守るために命を犠牲にする日本人もいれば、自らの意思で被災地に踏み止まって地域社会の一員として災害を乗り越えようとしている多くの「外国人」の姿が見えてきた。このことを声高く強調したいのは、宮城県でこうなったのは何も「東北人気質」とやらの、得体も実態も分からないためではけっしてない。こうなったのは、少数の人たち、日本人も外国人も、この地域における多文化共生を実現するために小さな努力を重ねてき

た結果であること、それが日本語教室のボランティアとして頑張ることであったり、町内会やPTAで活動する「外国人」であったりして、個人個人の日々の努力のたわまなぬ積み重ねの結果であること、そしてこの努力が他の地域でも十分に再現可能であることを強調したい。

宮城県では、地域住民が命を張ってでもこの地域の一体性を守ってきたのである。宮城の経験が他の地域に問いかけるのは、なぜ宮城でこれができるかということではなく、なぜこんな当たり前のことが他所ではできないのか、ということではないか。

宮城学院女子大学国際文化学科

J. F. モリス